

# 風景の声に 耳を澄ませる

## 第二十五回 化粧する地藏

(奈良県奈良市)

文・写真 増田 隆



やさしくつくしく

いわゆる「ならまち」に十念寺がある。現在は浄土宗の寺院であるが、元は鎌倉期に真言律宗の忍性が創建したとされている。

本堂脇の祠としては少し大きめの祠の中に「白粉地藏」が鎮座されている。よく見るまでもなく、お顔は厚く「おしろい」が塗り重ねられ、目鼻口がくつきりと描き込まれてある。かなりの迫力のあるお顔をされている。

今では、「きれいになりたい」という願いを叶えてくれるということになっているのだが、元はその昔、業の病と言われた「ハンセン氏病」を治してくれるという言い伝えがあつて、その願いが叶ったものが「白粉」を奉納していたとされている。ハンセン氏病によらず、皮膚の病気を患ったものたちが願をかけ、その願いが叶えば感謝の気持ち

込めて白粉を塗り重ねていったのであろう。

力強いお顔立ちには、病のある者たちへの大いなる慈愛が感じられてくるのである。

十念寺の「白粉地藏」は、病気の治癒という願掛けがあつたのだけれど、その一方でお地藏様の中には、理由はよくわからないのだけれども、お化粧が施されているというものを見かけることがある。

そのいわゆる「化粧地藏」と呼ばれるものの中となるのはどうも京都のようである。実際にどの地域からどのようにに伝播したものか定かではないのだけれども、丹波、丹後、但馬、近江、若狭といった地域の一部に、京都から伝わったという「化粧地藏」の風習が根付いている。その最遠の地なのか、ある



二月堂石燈籠脇の化粧地藏



ちよつとごめんさい

いはまったく別の系統として起こったものなのかは定かではないけれども、遠野や青森にも「化粧地藏」と呼ばれる風習が残されている。

そして京都のおそらく伏見に多く残されているものの流れが南に下ってきたと思われるものが、奈良市の奈良阪と呼ばれる一带に、わずかだがそのお姿を見せてくれている。

翁舞で知られた奈良豆比古神社の前、



ピンほけてごめんさい

二月堂石燈籠の脇にある石造地藏菩薩立像は像高が一メートル以上あるもので、なかなか立派なものであるが、お顔は白塗り、極彩色の袈裟を身につけて立っておられる。

奈良豆比古神社から般若寺へ向かう旧奈良阪街道を辿ると、路傍の小さな手造りの祠などに、かわいらしく化粧したのや、美しく着彩を施されたもの、ただ白い○を描いただけのなんとも素朴なものなど、さまざまな地藏石仏たちを見ることができ。

京都から発祥したと伝えられている近畿地方や小浜一帯の化粧地藏は、いわゆる「地藏盆」と密接に係している。七月の二十三日前後、あるいは月遅れで八月の二十三日前後に行われることが多い「地藏盆」は、子どもたちのため



子どもたちの落書きのよう

のお祭りである。「地藏菩薩」というのは、地獄の賽の河原にあつて、鬼に苛まれる子どもたちを救済するという説話があり、子どもたちを広く深く守護し給う仏として多くの信仰を集めた。その地藏菩薩と子どもたちの縁は今も根強く続いていると言つて良い。

路傍に祀られた石の地藏たちは、「地藏盆」を迎えると、子どもたちによって毎年新しくそのお顔に化粧を施されるのである。おんかかかびさんまえいそわか。

# やまとのこころ

— 其ノ八十二 —

## 大和古物と 水木コレクション (6)

宇賀志屋文庫主人  
奈良県立大学客員教授

岡本 彰夫

『文人世界の光芒』と古都奈良 大和の生き字引・水木要太郎(思文閣出版)  
2009所載「大和古物と水木コレクション」(3)



法隆寺聖皇曼荼羅幅



伊達政宗・秀宗書簡幅



風俗図



奈良文人寄書幅

〈第一回 昭和一六年九月一五日

村田泥庵 仲川明 黒田昇義  
田村吉永 高田十郎

①三重塔規矩図 ②讚仏乗抄 ③因明四種相違抄第三写本一冊 ④弱艸帖一折 ⑤吉田学軒翁行草一幅 展観

②は番付に述べた東大寺宗性の自筆本で本資料をもとに番付のところと詳しく述べた。③は同じく東大寺聖守法師の自筆本で寛元三年(一二四五)のもの。④⑤は当時宮内省御用掛を勤めていた、学軒吉田増蔵の書で十五堂とは奈良女子高等師範学校の同僚で特に親しく、学軒が昭和の年号を勘進したなどの話が出されている。新旧取り混ぜた展観に水木家の懐の深

さがある。

〈第二回 昭和一六年一〇月二五日

村田泥庵 仲川明 藤田祥光  
田村吉永 高田十郎

①仁王経版本一枚 ②三国仏法伝通縁起卷上及下刊本二折 ③十七条憲法註釈写本端物二枚 ④笛吹地藏懸板一枚 ⑤大御輪寺法華経箱一基 ⑥鉢峯寺蓮台三個 ⑦海竜王寺古柁一個 ⑧同寺木彫屋根一部 ⑨木彫古仏右手二点 ⑩牽牛子塚乾漆棺破片一点 ⑪乾漆仏小破片若干

①は三輪の神宮寺である大御輪寺旧什と伝えられる弘安四年(一一八二)開板の仁王経版本。西大寺の叡尊の名が読めるというもの。②は応長元年(一一三二)東大寺の凝然大徳開板の

ものを応永六年(一一三九九)に出版したものである。④は番付で紹介していた。⑤大御輪寺旧什で天文四年(一一五三五)の墨書がある。

〈第三回 昭和一六年二月一五日

村田泥庵 仲川明 黒田昇義 森口奈良吉  
田村吉永 川瀬一馬 米山徳馬 高田十郎

①木白作獅噛火鉢一基 ②青木千坊在銘瓦

①は赤膚焼の名工奥田木白の篋銘のある珍しい火鉢。②は延喜六年(九〇六)在銘の唐草瓦で現桜井市安倍の青木山の寺址から明治四三年に地主であった米田甚七が人夫四、五人を二〇日余りも使って掘り出した一四〇程の瓦の中から探し出した銘入りの瓦二点で、十五堂が入手した。

〈第四回 昭和一六年一二月二日

村田泥庵 仲川明 藤田祥光  
米山徳馬

①藤田祥光氏持参 元徳大寺所蔵及現存宝物図 文政三年写

①は第二回④の笛吹地藏に関する記録。

〈第五回 昭和一七年一月一五日

村田泥庵 仲川明 黒田昇義 高田十郎  
田村吉永 藤田祥光 米山徳馬

①蚩繩抄(日本異国合戦記)六冊 ②八幡愚童訓二冊 ③伏敵篇一冊 ④異邦来往断写本一冊 ⑤異国船渡来記写本上中下三冊(相州浦賀表江北垂墨利加船渡来之記)⑥雑記一冊 ⑦天誅組に関する写本一冊 ⑧伊藤蘭嶋書卷一卷 ⑨大槻磐溪書簡十二一通 ⑩十五堂翁絵葉書(年始状)及翁の漫画肖像集一冊 ⑪十五堂投書一冊

⑨について、水木家と大槻家は親族関係である(森口奈良吉夫人が大槻家の系累という)。

〈第六回 昭和一七年二月一五日

村田泥庵 仲川明 飯田衛 佐々木利三  
杉田定一 森口奈良吉 黒田昇義 森川辰蔵  
田中塊堂 高田十郎

①十五年会展観目録 ②台覧記並諸堂仏体数量記 ③経巻断片一箱 ④法隆寺虫喰経断片 ⑤伝太子筆宝塔経断片 ⑥本元興寺塔下掘出御舍利縁起一卷 ⑦天平経断片 ⑧願経断片三枚 ⑨道長公金峯山寺経断片 ⑩法隆寺大治一切経断片 ⑪二月堂焼経断片 ⑫談義屋経なるべき断片 ⑬法隆寺大般若経断片 ⑭装飾経断片 ⑮角寺心経 ⑯手鑑一帖 ⑰宝塔経断片 ⑱毘沙門天摺仏三枚

# あの人に出会える場所へ

## 第二回 「聖徳太子の道を歩く」

文・写真 小滝ちひろ



山田隆文さんが教えてくれた安堵町内の太子道

奈良県出身の有名人といえば、トッパンキングはやはり聖徳太子に違いない。有名すぎて、「奈良の偉人」と紹介しにくいくらいだ。

一部に「非実在説」もあつてややこしい。厩戸皇子、豊聡耳法大王、上宮王などと、名前だつていくつもあつた。それでも、一時代を成した政治家がいたことは間違いないと思う。

私がそんなことを意識するようになったのは、聖徳太子にまつわる「道」のことを知ってからのことだ。その道、通称「太子道」は主に二つのコースがある。

ひとつは、都があつた飛鳥(奈良県明日香村)と斑鳩宮(同県斑鳩町)の間を太子が通つたとされる道で、別名を「筋違道」。南北に長い奈良盆地の南東と北西を斜めに通る。

もうひとつは、斑鳩宮から磯長(大阪府太子町)の叡福寺にある聖徳太



法隆寺の聖徳太子坐像(模作)も毎回「つどい」に加わつた

か」となった。  
2コースとも法隆寺が起点。太子の命日とされる2月22日には磯長へ、秋の11月22日には太子誕生の地ともいわれる明日香村の橋寺へと、毎回100人ほどが参加し、寺僧らと一緒に歩いてきた。



田原本町内に残る太子道らしい斜行路。畑や住宅の間を通る細い道だった

残念ながら、車社会の現代に古代そのままの道を歩くというわけにはいかなかった。交通量の少ない道が選ばれたが、一部はバスで移動することになった。

太子ゆかりの道という確証はない。旗振り役だつた故高田良信長老は著書にこう書いていた。「世界遺産登録3周年に合わせるために急いで決めた『太子道』のまま、後世に誤つた伝承を残すのではないかと危惧している」(東方出版刊『私の法隆寺物語』)

本物の太子道は、想像以上の幹線道路だつたようだ。

飛鳥・斑鳩間の筋違道の場合、奈良県の中央部、田原本町の多新堂遺跡



三宅町は「つどい」に積極的で、踊りなどを披露して一行を接待した

で幅17・5m以上あつた飛鳥時代の道路跡が発掘されている。現代の道路では1車線の基準的な幅が3・5mなので、5車線以上にあたる。まさに古代のハイウェイと呼べそうな規模で、聖徳太子が愛馬にまたがって田舎道を静々と通つていた、というイメージではない。

今使われている広い道は、自動車の時代になってできたものばかりだ。「だからこそ、部分的に残る太子道の痕跡を感じてほしいと思うんです」と、奈良県立橿原考古学研究所の指導研究員、山田隆文さんは話す。

山田さんは2018年初め、太子道のつどいの同行講師を法隆寺から頼まれた。途中の数カ所で、考古学



橋寺では、全員で読経してつどいを締めくくつた